

ミニ・シリーズ:農に関わる営みと暮らし ～日本における様々な動き～

その2: 伝統文化の保存と継承～衣・食・住を見つめ直す～

神奈川県川崎市多摩区に市立日本民家園(昭和42年開園)がある。おもに東日本の代表的な古民家や小屋・建物など20数軒が保存され、展示室では民家に関する基礎知識を学ぶことができる。民家内には農具や機織り・わらや竹細工など生活用具類が展示されると同時に、年間を通してそれら民具類に関する講座、体験学習や製作実演会が“民具製作技術保存会”、“神奈川紙漉き研究会”の協力をえて開催されている。産業構造の転換から農山漁村の荒廃がすすむ状況下、保存会や研究会の方々は生活に関わる伝統的な“手わざ”を保存し、伝え、継承するべく、手弁当で全国から情報を収集しまとめ、講座や実演を行っている。今回、わら草履作りをはじめとして“竹細工”や“紙漉き(和紙)”といった体験学習に参加した。自然素材を用いて自らの手で生活用具を生み出す作業は、苦労はしたがとても新鮮な感覚で面白かった。とはいえ本来、紙漉きは水温が5-10℃となる農閑期の作業であり、わら細工も夜なべ作業であるから楽しいといえは失礼かもしれない。それでも、参加者の大人も子供も真剣かつ喜々として取り組む姿勢を見ることができた。ただ保存会の方いわく、「保存会の会員に伝統技術を伝える若い世代がほとんどいない。」と、憂慮されていた。

新潟県西頸城郡能生町西飛山地区。上越市と糸魚川市にはさまれ、日本海にそそぐ能生川に沿って河口から約15km遡った最も上流に位置する民家20軒ほどがのこる集落である。冬の積雪は6mにもおよぶ豪雪地帯であるが、厳しい風雪に耐える茅葺きの古民家(現在は、トタン板がその上を覆っている。)がのこる。しかし、住民の高齢化はすすみ、人口増加率はマイナスで、山をおりるか鬼籍にはいることで家主不在となった古民家が藪の中でつぎつぎと朽ち果てていく。自然素材を利用し、日本の気候風土にマッチしたその家屋は、シックハウスなど人体や環境にあたえる悪影響とは無縁で、太い梁、竹簀子の天井、板の間や囲炉裏が、不思議と気持ちを落ちつかせる。かつて農村がいきいきしていた頃、家屋の普請(=建築や維持管理)は、業者まかせではなく、専門の職人の仕事と村人たちの相互扶助による仕事の組あわせにより行われ、自然と人と人が密接につきあう地域社会があった。また、この地方に古くからつたわる笹寿司は、地元で獲れる山や海の幸をつかって作られ、とてもおいしい。夏場の保存のために笹の葉をしき、酢飯の上に山菜等を載せた寿司は、祝事のときに食されたという。農とかかわる衣食住の暮らしのすべてが、人と人との交わりの中で文化や伝統を生み、育んできたのである。

最近、食の安全や生活スタイルの見直しに基づいて、食農教育、スローフード運動^{*1}、身土不二^{*2}、グリーンツーリズム^{*3}などといった言葉や関連する動きが盛んに見られるようになってきた。しかし依然としてモノがあふれ、好きな時に好きなものを金で買って食べる飽食に、産業構造の転換、儲け優先主義、便利さの追求、生活様式の欧米化などにともなった輸入材や化石燃料を原料とした安価な製品を買い、使い、捨てる生活。化石燃料を燃やして年がら年中エアコンをきかせ、マンションの閉じられた空間を快適に便利に過ごす生活は、あまりにも農とかけはなれている。「Culture:文化」の語源は、「Cultivate:耕す」である。Agriculture / Silviculture / Aquacultureとともにある生活の中から文化が生まれ育ち、伝統の保存と継承がなされてきたが、戦後、我々の多くはそれらを遠ざける暮らしを続けてきた。しかし、こうした伝統文化の中にこそ、国や民族としてのアイデンティティを表すものがあると思われる。まず、衣・食・住から生活を見つめなおし、伝統文化を保存し継承することによって心豊かなあるべき暮らしの姿が見えてくるのではなからうか。そういった暮らしは、地球全体への負荷を減らし、東西南北を問わず世界の国々が今後すすむべき良き手本となるのではないだろうか。

^{*1} 1989年にイタリア北部地方の町から起こった動き。ファーストフードと対極にあり、ゆっくり楽しく食事をする、伝統的で質の良いものを食べる、生産者をまもるなどといった運動で、その精神は、食を通して生活を見なおすことにある。

^{*2} 仏教用語:体と土とはひとつであるから、自分の三里四方で育ったものを食べ、生活するのがよいとする考え方。

^{*3} 農山漁村地域の自然や文化に触れ、地域の人たちとの交流を楽しむ余暇活動。“体験民宿”ではそれを満喫できる。



体験学習会「紙漉」



古民家(トタン屋根の下は茅葺き)



郷土食の笹寿司